

遺書には

知る限りの花を描く

青野 椰栄 東京都

遺書といえは死を意識した際に行動するもの。けれど、意志を書き記そうとすると、目の前に迫る死の気配に言葉が詰まって出てこない。生への苦しみや死への恐怖を書き綴るより、美しい花で埋めたい。それなら、死を迎える瞬間にも少しだけ救いを期待できるかもしれない。

ケーブルのように絡まる冬の念

松下 誠一 東京都

冬には念があるらしい。すべての季節の中でも冬は異質で、眠るものが増える。その余白に冬の念が滲んでくるのだ。人間の生ぬるい意識が重なる中を立ち昇っていく。ケーブルの柔らかく、しかし絡まるほどに痛んでいく内部のような念。

ぬかるんでからが恋路と嘯く狸

田崎森太 東京都

人間同士が関わるときは軽やかなままでいることはできない。分かっているのに、関係が始まった時にいつも忘れてしまうのはなぜなのだろう。人間はいつも真理を知らない。「ぬかるんで・嘯く・狸」と啗内の空間の広がりを感じるウ音が良い。知らぬ間にそこで広がっていつてしまう沼がある。

桃を吸う舌に育ちの悪さあり

玻璃 愛媛県

「吸う舌」というと、迎え舌などを思い浮かべ、育ちの悪さを思ってしまう。しかし、品からはエロティシズムは生まれない。桃に齧り付き啜る様は汚らしさと生命力を感じる。食欲を露わにすること自体本当は品のない行為で、みなそれを知らずに行い他者を育ちが悪いなどとジャッジしているのだ。

変わったねも

変わらないねも言われずに

同窓会の大根サラダ

うろ仔 北海道

同窓会には行くこと自体に自傷行為のようなものが含まれている。主体は変わったつもりで同窓会に参加したのだろうが、誰にも気付かれなかった。懐かしさや喜びを共有する“特権”を持って、大根サラダを食べている。大根サラダのような存在になりながら。

折り線の通りに傘を閉じていく

理性を愛と言う人の手は

羽水繭 大阪府

愛は、愛するほどに内訳が増えていく。想い続けることの難しさを知った時、乗り越えるための理性や技術を愛と信じるしかないときがある。傘の折り目を見ながら畳んでいるようで、その先の自身の心を畳んでいく。

夏は夜

カスタードまぜくるときにしか

雲理そら 大阪府

みせないきみのやわな加虐性
混ぜる行為は、平らかな表面を裂き中の均衡を変えることでもあり、たしかに加害となり得る。そして、「彼女」はそれ以外にはその心配がない。いつも加害される側なのかもしれない。罪悪感のない加害が夏の夜に繰り返される。

羊水にひらひら浮かぶ

コンタクトレンズのひかり

芝生に漏れて

常田 瑛子 山口県

明るいこの世でも紛れないほど、体内の命の揺らめきは翳らない。羊水のひかりがコンタクトレンズを通して溢れる。そして芝生に触れて、水滴になる。命の揺らめきは形を変えてこの世に触れていく。

実は私のあばら骨の一本は

昨年死んだ犬のものです

平山 東京都

愛するものを亡くしたとき、体の中にしまい込んでこれ以上失わずにすむようにしたい。骨

を食べる人もいるように体の中にそっくりそのまま骨を埋め込む人もいるかもしれない。けれど、実際にしてしまったら拒絶反応なんかも出てくるわけで、すなわち遺された側の死まで運命を共にしたいというエゴに体のみ拘束され続ける。

ラー油を目に入れたみたいな

夕焼けだ

花

ちぎってもちぎっても恋

東京都 結城熊雄

ラー油が目に入ったら開けていられないくらい痛いになる。油ゆえに流すのも時間がかり、真っ赤に染められた視界で見えるものは何もかもが赤い。けれど、美しいものは本当は痛い。恋をする心も、痛みと引き換えに美しさを知るのだろう。